

認知症を「支える」から「共に生きる」へ

— 福岡県大牟田市における実践を通して —

医療法人静光園 白川病院 医療連携室長

猿渡 進平

saru@shirakawa.or.jp



本日本話したいこと

1 認知症を地域で支える（20年の実践）

2 実践からの違和感

3 認知症とともに生きるまちづくりとは

本日本話したいこと

1 認知症を地域で支える（20年の実践）

2 実践からの違和感

3 認知症とともに生きるまちづくりとは

認知症を地域で支える（20年の実践）

認知症SOSネットワーク模擬訓練との出会い（2004年-）

1. 認知症の人と家族を支え、見守る地域の意識を高め認知症の理解を促進していく
2. 高齢者を隣近所、地域ぐるみ、多職種協働により可能な限り、声かけ、見守り、保護していく実効性の高いしくみの充実
3. 認知症になっても安心して暮らせるために、「安心して外出できるまち」を目指していく

各小学校校区での実行委員会の設立

実行委員会メンバー（校区によってメンバーは異なる）

- 民生委員・児童委員協議会
- 校区社会福祉協議会
- 地域包括支援センター
- 大牟田市 福祉課
- 校区町内公民館連絡協議会
- 地域の医療、介護事業所(事務局)
- 認知症ライフサポート研究会運営委員

認知症を地域で支える（20年の実践）

2007年9月23日（日）

参加者：9名 / 外出役：1名

第1回 白川校区 認知症SOSネットワーク模擬訓練



実行委員を中心に、事務局に集合し開会式を実施した。

事前の認知症学習として、認知症サポーター養成講座・声掛けの方法・道に迷った方を見つけた際の連絡先等を学んだ。その後、外出役に対し声をかける模擬訓練を2時間実施した。*連絡網無し。啓発メイン。

認知症を地域で支える（20年の実践）

現在までの認知症SOSネットワーク模擬訓練の参加者状況

	19年度 (2007)	20年度 (2008)	21年度 (2009)	22年度 (2010)	23年度 (2011)	24年度 (2012)	25年度 (2013)	26年度 (2014)	27年度 (2015)	28年度 (2016)
外出役	1名	6名	20名	26名	26名	26名	26名	50名	26名	13名
参加者	9名	87名	240名	165名	167名	162名	185名	232名	192名	202名
声かけ	1件	35件	361件	247件	268件	317件	299件	492件	304件	151件

※28年度は2回実施



認知症を地域で支える（20年の実践）



退院前の担当者会議の場面

本日本話したいこと

1 認知症を地域で支える（20年の実践）

2 実践からの違和感

3 認知症とともに生きるまちづくりとは

実践からの違和感

模擬訓練当初から訓練の実行委員長として活動してきた住民の声

模擬訓練の 成果

多くの住民が活動に参加するようになり「地域の中での体制」が構築できつつある。熱心に「認知症の人を支えましょう」と言い続けてきた結果だと考えている。

懐疑的な こと

長年、この訓練に携わってきた人が認知症になり、閉じこもりがちになっている。これは「認知症になっても安心して外出できる」という目的とは逆の結果である。

私自身に置き換えてみると、認知症になったら「恥」をかきたくないなので自宅に引きこもるだろう。自分の中の認知症像が「それ」であるとするれば、多くの住民も「そう」である。訓練が「それ」を作ってきたのかもしれない。

NPO法人しらかわの会 理事長 前原 剛さん

実践からの違和感

事例1：行方不明になった後、施設へ入所した事例

80代の女性が行方不明になる。行方不明の情報が流れ、およそ2時間後に本人を発見。

夫が警察に迎えに来て自宅に帰ることができた。地域包括支援センターや地域住民は、本人を見守るための体制会議を実施し、定期的な見守りを行うようになる。その1週間後、本人は施設へ入所する。



事例2：噂から地域住民が心配し、本人のゴミを集積場に運んだ事例

80代女性。自治会の行事や旅行を楽しみに生活していた。ある時から「認知症では？」という噂が流れ始めた。

地域住民は、本人はゴミの分別などができないのではないかと心配し、本人の庭に置いてあったゴミを集積場に運んだ。本人はそれに憤慨し、外出をしなくなり引っ越した。



実践からの違和感

私たちは、「誰のため」に「何のため」に
支援・活動をしてきたのか



個別支援の中で
目の前の人と出会い直す

本日本話したいこと

1 認知症を地域で支える（20年の実践）

2 実践からの違和感

3 認知症とともに生きるまちづくりとは

関わり方を変える

可能性思考

- ① 本人の声をきく
- ② 肯定する
- ③ 一緒にやってみる

デザインの流れ

How to Design



専門職の意識変容

事例1：元々学校の先生だった70代男性の事例

本人



Kさん
(70代男性)

- 妻と2人暮らし
- 数年前から物忘れ、妻に対する暴言等があった
- 認知症外来を受診し診断を受けた
- 妻が閉じこもりになっている本人を心配し、介護保険の認定を受ける。結果は要介護1
- 現在はデイサービスを週3回利用

専門職が可能性指向に基づき、本人との対話を深めると…

- Kさんの経歴：学校の教員、塾の講師、市議会議員など
- 本人は「今でも人の前で話すのが好き、社会の為に役に立ちたい」と強く願っている

小中学校の「認知症教室」で子どもたちに話す機会を作る

専門職の意識変容

本人の様子



- 本人は始めは躊躇していたが「私のできることなら」と引き受けてくれた。
- 生徒の前で「自分のこと」「認知症になってからの体験」「認知症の人への接し方や工夫」等を堂々と話してくれた。
- 帰りは足取りが軽く「次はいつあつとね？」と嬉しそうに話してくれた。

生徒の感想

認知症になってもいままですり生活もかゆらない人がいる。心配さ水すず"て声をかけられず"たらす"くかんでしまう。接しかたは、今まで"と"あつにしてもらったおかげ"が"りかた"いなよ。最後には夢を持つことが大事ということがわかりました。

認知症の人でもポジティブで、物忘れもろにまでひどくもなく、特別なあつかいをする必要はなく、みんな一緒に自然に生活することが大切と思いました。

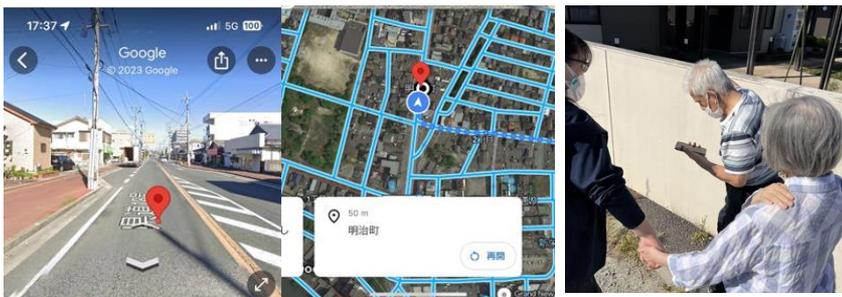
認知症とともに生きるまちづくりとは

自分でできること「タウンウォーク」

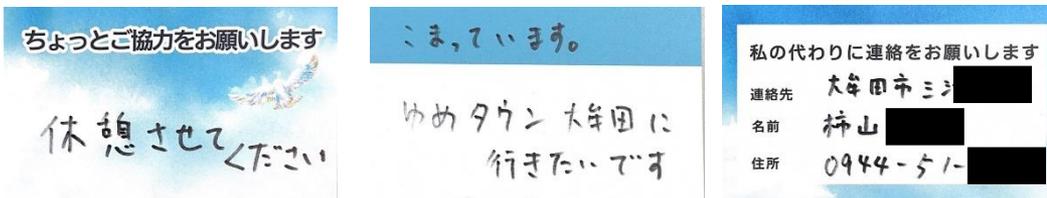
本人の予防的
な取り組み



①地図アプリを活用した練習



②ヘルプカードを使った練習



周りができること「大牟田市ほっと安心ネットワーク模擬訓練」

いざという時の情報伝達 & 搜索の訓練

認知症とともに生きるまちづくりとは

- 図書館の使いにくさを伝えてみる。



- 特別な設置スペースの開設



- 券売機の使いにくさを伝えてみる。



- ちょっとした表示の工夫



課題指向から可能性指向への転換

目の前の本人の**可能性に目を向けて**
ともに楽しみながら実践を重ねよう！

